

マインツの岡道男先生

平田公夫

岡先生御夫妻とはじめてお会いしたのは、1988年も押しつまった12月末のことであった。マインツ大学構内にある宿泊施設Gastprofessorenhausの玄関前で、先生御夫妻が買い物に出かけられるところに、ちょうど引っ越して来たばかりのわれわれ3人が外から帰ってきたときのことであった。2、3日後の大晦日には早くも先生のお部屋で年越しそばやお寿司をいただいている。それから約9ヶ月間同じ宿舎で一緒にすることになった。

この大学宿舎は2階建てのこじんまりした建物で、1階には広間や管理人の住まい、地階に洗濯場などがあり、住居は2階のみであった。中庭を中心にちょうど口の字形をしており、四隅に家族用の部屋、その他に単身用の部屋が6つほどあったように記憶している。2階は中庭を囲む形でぐるりと廊下がめぐっており、そのため岡先生とわれわれとはちょうど対角線の位置関係にあったが、建物内部での行き来はじつに容易な構造をしていた。

もちろん先生は日中はたいていお仕事をされており、両家の付き合いは必然的に岡夫人と家内を中心にして回るようになっていった。したがってマインツでの先生の思い出や印象も、もっぱら日常的な場での先生の言動が主であり、先生のお仕事振りや学問のことについては、残念ながらわれわれはあずかり知らない立場にあった。しかし、ボッパルトでウィンドーショッピングをしながら散策していたとき、先生が何か関心を引かれた単語があったのか、小声で何度も繰り返されていたことがあった。このときのことは、家内が当時マインツ大学でドイツ語を勉強していて、単語力の不足を嘆いていると、「70回辞書を引きなさい」というのが先生の口癖であったと夫人から聞いていたので、先生ご自身の努力の積み重ねを間近で実見したような思いがしたからか、妙に記憶に残っている。

さて、午後のお茶とか夕食とかのやりとりや買い物とか、互いに行き来するなかで先生はいつも同席・同行してくださり、にこにこ笑みを絶やされることはなかった。また、「どこへ行っても同じ」と言われる先生をあちこち車での日帰り旅行に連れ出したのもわれわれであり、先生にはとんだ闖入者であっ

たかもしれない。コッヘムやバッハラッハやパート・ホンブルクなどへのエクスカッションも忘れがたい思い出である。ホンブルクでは、クライストの『ホンブルク公子』のお話をしてくださった。

マインツでの先生といえば、まず思い出すのは、午後の昼下がりにいつもお二人で一緒に買い物などに出かけられる姿と、何かお尋ねしたときには実に丁寧にお答えしていただいたことである。この丁寧さは帰国後にお送りした拙訳や拙文に対していただいたお礼状にも貫かれていた。他には、小鳥の餌を卵型に丸く固めて糸で吊り下げようにしたものを買ってこられて、庭の木の枝にかけ、鳥がついばむのを居間から眺めるのを楽しみにされておられたこと（ある時には「鳥が来ている」とわれわれに声をかけてくださったこともあった）とか、星座表をもっておられてわれわれの当時5歳の娘にベランダでやさしく説明してくださっていたことなども思い出され、先生のお人柄がしのばれる。

今回この思い出を書くにあたって記憶を確かめようと、昔のメモや写真などをあらためて見直してみたが、そこには柔和な笑顔の先生しかおられず、なおのこと早すぎるご逝去が信じられない思いである。高槻にお邪魔すれば、今でも先生にお会いできるような、そんな気もする。……心からご冥福をお祈りいたします。